

平成18年度 事業報告書

学校法人 白梅学園

〔I〕 法人本部

1. 年初事業計画の振り返り

新設の「白梅学園清修中学校」は、定員にほぼ近い57名の生徒を迎え、成功裏に開学しました。また、中学・高校校舎整備計画の第1期工事につきましては、予定どおり9月に完成し引渡しを受け、清修中学校が後期の授業を新校舎で開始しました。教職員や関係者の努力でソフト面・ハード面とも頗る評判が高く、順調な滑り出しと評価できます。

2年目を迎えた大学も、受験生が多く集まりこちらも高い評価を受けています。大学・短大で文科省の教育支援プログラム（GP）に2件採用されるなど、外見上の整備だけではなく、教育・研究の中身についても少しずつ向上が見られました。

2. 財務関係

消費収支の「収入」につきましては、大学は、入学定員を極力遵守する方向で取り組んだ結果、入学者数は133名、短大の保育科も111名と昨年より抑え、心理学科は定員をキープできましたが、福祉援助学科と福祉専攻科は定員を割った結果、短大・大学の学納金は95百万円の減収となりました。高校の募集は268名で、新設の清修中学校は厳格な選考入試を行いつつ、定員に近い57名の入学となりました。この結果、中学・高校で65百万円増、幼稚園は横這いで合計29百万円減の1,727百万円となりました。補助金は、中学関係が主で40百万円の増収、退職者が増え退職者財団の交付金が17百万円の増で、帰属収入totalで29百万円増の、2,568百万円となりました。

支出面では、中学と大学の教員の増員や定期昇給及び教員の雇用保険加入等と、退職者が増えたことで人件費が102百万円増加しました。システム関係の費用は一段落し、募集経費も抑えることにより管理経費は38百万円減りましたが、中学と大学の教育研究経費が9百万円増加しました。この結果、消費支出合計は対前年71百万円増の2,649百万円となりました。

基本金は、借入金返済額と図書購入費分が組入れ対象となります。新築校舎とその什器・備品購入は借入金で賄うため組入れ対象とはならず、最終組入額は84百万円となり、この結果、「基本金組入後消費収支」は164百万円の支出超過となりました。

次に、貸借対照表の資産の部につきましては、中学・高校校舎整備第1期工事（K棟）の今年度支払額相当が増加し、有形固定資産が403百万円増加しました。その他の固定資産は退職給与引当金特定資産が29百万円積立不要となって、26百万円減少しました。流動資産はK棟の工事代金を支払ったため現金預金が544百万円減少し、資産は合計172百万円減となりました。

負債の部につきましては、借入金の返済が進んだことと、退職給与引当金の減少で92百万円の減となりました。この結果「総負債比率」は32.7%と0.6ポイント改善しました。消費収支差額（累計支出超過）は2,587百万円で、「基本金・消費収支差額合計額（自己資金）」は3,706百万円となり、総資産に対する割合（自己資金比率）は、67.3%と0.6ポイント改善しました。

3. 総務関係

(1) 平成18年度は理事、監事、評議員の改選年にあたっており年度途中で変更がありました。

①平成18年度当初の理事・監事、評議員は次のとおりです。

理事・監事		評議員			
1号理事	無藤 隆 平賀明彦 秋田中子 田村敦彦	1号評議員	無藤 隆 平賀明彦 秋田中子 金田利子 田村敦彦	3号評議員	松永輝義 両角純子 増田昭一 浅倉静子 野口桂子 佐藤信子
2号理事	上木光夫 澤井敏和 金田利子 松永輝義	2号評議員	関谷榮子 八木紘一郎 中山正雄 吉川研二 上木光夫 柴田哲彦 松本 匠 土門久美子 西田末夫	4号評議員	鈴木三男吉 中島百合子 西口栄一 澤井敏和 大山美和子 谷 美智子 高橋康昌 稻田百合 竹谷廣子
3号理事	小松隆二 門上千恵子 山田美和子 上野保之 横田吉男 海上玲子				
監事	阪谷芳信 長倉 澄				

②改選後は次のとおりで任期は、理事は平成19年1月20日から平成22年1月19日まで、評議員は平成19年1月8日から平成22年1月7日までとなります。

理事・監事		評議員			
1号理事	無藤 隆 平賀明彦 秋田中子 田村敦彦	1号評議員	無藤 隆 平賀明彦 秋田中子 金田利子 田村敦彦	3号評議員	松永輝義 中村 健 増田昭一 浅倉静子 野口桂子 佐藤信子
2号理事	上木光夫 澤井敏和 柴田哲彦 金田利子	2号評議員	関谷榮子 八木紘一郎 久保木壽子 民秋 言 上木光夫 柴田哲彦 松本 匠 土門久美子 西田末夫	4号評議員	鈴木三男吉 中島百合子 西口栄一 澤井敏和 大山美和子 谷 美智子 高橋康昌 稻田百合 竹谷廣子
3号理事	小松隆二 門上千恵子 山田美和子 上野保之 横田吉男 海上玲子				
監事	阪谷芳信 長倉 澄				

③就任理事・評議員

理事 柴田哲彦

評議員 久保木壽子

民秋 言

中村 健

④退任理事・評議員

理事 松永輝義

評議員 中山正雄

吉川研二

両角純子

(2) 人事の異動

学内人事につき省略

(3) 理事会、評議員会の開催状況及び議題

理事会

平成18年4月24日 短期大学学則変更の件

平成18年5月16日 平成17年度事業報告及び決算審議の件

7月11日 平成19年度学費及び検定料・受験料の件、高校学則変更の件、「白梅学園大学・白梅学園短期大学児童福祉施設出身者学生奨学金規程」の件

11月14日 大学学則変更の件、大学院設置準備委員会発足の件、3号理事、監事及び4号評議員留任の件

平成19年1月9日 2号及び3号評議員選任の件

1月16日 2号理事選任の件

1月23日 理事長選任の件

3月13日 平成18年度補正予算の件、平成19年度事業計画及び予算の件、短大学則変更の件、法人規程改訂の件、幼稚園園舎建築委員会立ち上げの件、平成19年度理事会開催日程の件

評議員会

平成18年5月16日 平成17年度事業報告及び決算審議の件

平成19年1月9日 監事選任の件、2号理事選任の件

平成19年3月13日 平成18年度補正予算の件、平成19年度事業計画及び予算の件、平成19年度評議員会開催日程の件

なお、常勤理事会は下記の日程で開催しました。

平成18年4月10日、5月8日、6月12日、7月10日、9月11日、10月16日、11月13日、12月11日

平成19年1月15日、2月5日、3月12日

(4) 専任教職員数（平成18年4月1日現在）

職種	人 数		前年度差	備考
	平成17年度	平成18年度		
大学教員	16	19	+ 3	
短大教員	24	20	- 4	
大学・短大共通	5	6	+ 1	実習講師・カウンセラー
高校教諭	41	45	+ 4	
中学校教諭	6	7	+ 1	平成17年度の6人は中学校設置準備要員
幼稚園教諭	12	12	0	
事務職員	41	41	0	
計	145	150	+ 5	

〔Ⅱ〕 白梅学園大学

1. 教学・教務に関する執行状況

- (1) 4年制大学の開設2年目に当たり、子ども学部のカリキュラムが混んできたことに対応し、短期大学3学科1専攻科との調整、とりわけ時間割、教室配分に意を用い、スムーズな授業展開を心がけました。
- (2) 執行部会議を毎週定例で開き、日常的な課題に取り組むとともに、中長期的な将来構想、人事政策などについて企画、立案し、また具体的な申請作業などをリードする役割を果たしました。また、短期大学の抱える問題についても、同様に検討を加え、学部と短大の関係整備、連携強化にも力を注ぎました。
- (3) 地域に開かれた大学をめざす取り組みもさらに強め、また、他大学、教育機関との連携強化にも努めました。とくに従来から取り組んでいた「子育て広場」を組織的に強化し、また学生の積極的参加を引き出す体制も整えました。その一方、メンタリングを生かした資質に富んだ教員養成に関して東京学芸大学とのコンソーシアムに取り組みました。幸い、前者は「特色ある大学教育支援プログラム」、後者は「資質の高い教員養成プログラム」の、いわゆるグッドプラクティス（G P）に採択され、さらに強力に推し進めることができました。また、本学の教育を広く地域に発信する活動の一環として、公開講座の開設や科目等履修による授業の開放、あるいは他大学や教育機関との連携による単位互換を進め、とくにネットワーク多摩が推進する高校生対象のチャレンジキャンパスプログラムには積極的に参加しました。本学の研究・教育の成果を広く情報発信するための試みの一つとして、本学教員を中心とした保育・教育に関する講演会を、仙台、新潟、横浜で開催しました。白梅学園の知名度をあげることも目的の一つであり、広報活動の一環としても位置付けましたが、各会場とも盛況で目標を達成することができました。以後も継続的に実施していくことが重要であろうと思われます。
- (4) 多様なニーズに応えるための豊かな教育内容や、それをプランニングし実践する教職員スタッフの能力の向上が求められる中、教育方法や実務能力を高めるためのF D、S Dの取り組みを行いました。F Dに関しては、他大学での実践事例の報告会などを3回にわたって実施し、全教員の参加を求めました。
- (5) 自己点検・評価では、とくに教学部門では、その中心となる授業評価について、演習など一部授業を除いて、全科目での完全実施を達成し、授業改善に取り組むとともに、その結果分析も含めて、10月には、開設1年目の点検・評価内容を冊子にまとめ、学内外に開示しました。
- (6) 各種実習に関する業務を統括し、また実務を担う組織である、実習指導センターの整備充実をはかりました。専任事務体制を確立するとともに、実習講師人数も増やし、各種実習の円滑な指導に力を注ぎましたが、とくに指導スタッフの数的整備がまだ課題として残されています。
- (7) 大学及び短期大学の諸組織、諸設備等に関する将来構想の検討では、前年度に出されたワーキンググループからの答申を受けて、とくに大学院構想と付属幼稚園の園舎建

設及び教育・福祉研究センターに関して具体的なプランづくりあるいは改編作業を進みました。大学院に関しては、次年度の申請準備に取り組み、園舎建設に関しては予算面との擦り合わせを図りながら、マスター・プランの作成を行いました。教育・福祉研究センターについては機構改革を行いつつ、子ども学研究所開設の準備を進めました。

2. 教務・学生関係

(1) 学生数

平成18年度は子ども学科2年生は149名、1年生は133名でスタートしました。尚クラスはそれぞれ3クラスで担任教員を配しました。

(2) 教育課程と教務事項

①学事日程の編成と授業週数の確保

平成18年度も従来と同様の学事日程で教育活動がスタートしましたが、8月に開催された厚生労働省関東地方厚生局の養成施設連絡会議では、授業回数の15回確保が大きな課題の一つとして出されました。その結果、その対応に追われる状況となり、授業運営上、問題を残すこととなりました。実習実施期間や学事日程等の抜本的見直しが喫緊の課題となっています。

②授業方法の改善と教育機器等の環境整備

より効果的な授業方法等を目指してFD等の取り組みがなされ、情報機器等を活用した授業展開の工夫が取り組まれています。他方、教育機器等の更新や設備改修の面での遅れが目立ってきており、重点的な対策が求められてきています。

③適正な入試の実施について

今年度初めは、前年度後期（平成18年1月～3月）に実施された入試問題での出題ミス等についての、訂正及び是正措置などの対応を集中的に行うこととなりました。是正措置として検討されたミス防止対策では、内部チェック体制の充実と併せて、外部機関へのチェック委託が採用され、実施に移されました。また、これら出題ミスは、一部の出題担当者への過大な負担などが原因となっていると考えられ、それらに対する抜本的な対策が検討されねばならず、今後の課題として残されています。

④科学研究費採択と事務管理体制の整備

ここ数年、徐々にではあるが科学研究費をはじめとする、いわゆる「競争的資金」の採択が増えつつあります。平成18年度は新規採択が3件ありました。今後もさらに申請件数、採択件数の増大を目指していくとともに、「公的研究費」の機関管理のルールや体制の確立が急がれています。

(3) 学生生活の支援

保健センター室、学生相談室などは短期大学生への関わりと同様の取り組みで、学生生活の支援を行いました。子ども学部の学生のそれぞれの利用状況は以下の通りです。

(保健センターの利用状況)

- ・救急処置 374件
- ・健康相談 129件
- ・健康教育 154件
- ・その他 36件
- 合計 693件

(学生相談室の相談内容別利用件数)

- ・適応障害 248件
- ・家族問題 9件
- ・その他 27件
- ・親利用 32件
- 合計 316件

また、子ども学部の場合は、資格取得の種類が多いことや将来に対する不安、学習に関する不安を抱える学生が多いことが予想される中、早い時期からそれらの悩み相談に対応できる態勢を整えることとし、専任教員を配置して学習支援室を開設し、主として科目履修や将来の進路などについての相談に対応することとしたが、前期の中ごろくらいから学生の来室が多くなり、とくに後期には小さな悩みも含めざっくばらんに話のできる場として、多くの学生が活用するようになり、そこを通じて、学生の動向や抱える悩みなどを把握することができました。

学生生活の支援に関しては、昨年度末に実施した学生生活アンケートの結果をふまえ、そこで明らかとなった問題点、あるいは学生からの様々な要望に応えて、対応できることから順次取り組みました。

学生寮（若葉寮）については、寮生の自主自立を基にした共同生活の確立をめざす必要性を感じ、寮生との話し合いを通して指導に配慮しました。

学報「プラムタイムス」（9月、3月刊行）は後援会員や同窓会全国支部にも発送され、学園の近況報告とともに情報交換の場にもなっています。

学資の援助を必要とする学生が昨年度に続いて増加し、今年度奨学生の受給者は80名でした。在籍数に対する奨学生の割合は28%でした。

3. 学生募集

(1) 志願者数の状況について

子ども学部は開学3回目の入試を迎えるました。教員養成系の志願者が国公私立の区別なく減少しているという現象、競合校において学部学科新設や都心回帰などの動向もあり、募集はかなり厳しい状況が予想されました。そのような中、今年度は新潟と仙台で地方試験を実施するなど多様性と機会の拡大を図りました。その結果、総志願者数は941名と前年より減少したものの、入学定員に対して7.8倍の数値を確保しています。これは、前述した入試動向や公募推薦の高倍率によるリバウンドなどを勘案すると依然堅調な推移を示していると考えられます。

また、高校ランクと評定平均値では全般的に上昇がみられます。背景として首都圏「進学校」からの出願増があり、この地域で子ども学科の評価が定着してきた感があります。

(2) 制作物について

メインの制作物である年度版「ガイドブック」は、短期大学とは異なる遡及点もあり、別編集の分冊としました。配布先は高校、生徒、予備校、同窓会員などでしたが、その一方でWeb媒体を介した直接請求も増加しつつあります。また、補充ツールとして、教員向けと教員養成GPに係わるリーフレットを作成しました。

(3) ホームページについて

本学ホームページは、四年制大学、短期大学、高等学校、清修中学校、幼稚園が並立する構成であり、総合的な教育機関としての全容が把握できるスタイルとなっています。4年制大学ページにおいては、適時に行事告知を実施するなどし、また更新頻度の向上に努めました。

(4) 相談会・高校内ガイダンス・出張講義について

多くの教職員の協力を得て、会場相談会、高校内ガイダンス、出張講義等に積極的に参加し、直接、受験生に説明する機会を重視する姿勢で取り組みました。また、本学独自の

高校教員向け相談会を、立川、新宿、横浜、大宮の四会場で開催しました。

(5) 高等学校・予備校訪問について

プロパーによる高校訪問は、地方入試の実施を踏まえ、東日本のかなり広範な地域をカバーしました。また教職員の協力を得て、全学的な高校訪問を5月～6月、11月の2回にわたり実施しました。この2回の大掛かりな高校訪問は、首都圏「進学校」を中心とした四大志願者の基盤拡大を意図したものでしたが、同時に短期大学志願層の掘り起こしにも寄与しました。また昨年同様、首都圏を中心とした予備校訪問を実施しました。

(6) オープンキャンパスについて

近年ではオープンキャンパス参加を授業の一環とする高校もあり、募集関連行事との比重はますます高まっています。また、数年来保護者同伴の参加も増加の一方です。これに呼応し、体験授業や予備校講師による入試対策講座、現職による職業理解の講演、教員採用試験へ取り組みを紹介するなど、内容上の工夫を図りました。また、学生サポートによる体験談や学内ツアーなど、従来以上に学生参加型のオープンキャンパス運営を目指しました。

(7) 白梅学園高校との関係

併設高校と協同した、一年生対象の施設見学会、二年生対象の体験授業、保護者向説明会などを実施しました。また、特別推薦合格者に講義形式の講座を1月中3回開催し、さらに保育系の合格者については「子育て広場」イベントへの選択参加を課し、実践的な入学前指導を行いました。今後も、白梅学園高校生へのオープンキャンパスの実施やチャレンジキャンパスへの受け入れを積極的に行い、総合学園として一貫性のある連携指導をさらに充実させていく必要があると思われます。

4. 事務組織の改善

事務部門では、平成18年度は、特に短大保育科の定員増申請、保育士養成施設及び介護福祉士養成施設の指定基準の遵守の確認、大学改革推進等補助金はじめ経常費補助金確保のための申請、自己点検評価報告書作成、短大50周年に向けた企画準備などを行いました。大学事務職員の資質向上のための取り組みとしては、各部署ごとに関連の研修会に積極的に参加し研鑽に励みました。学内では、キャリアアドバイザーの資格をもつ進路指導課長に講師をお願いし、大学職員また社会人としての基本的な姿勢について学びました。

5. 自己点検・評価

昨年度「白梅学園大学自己点検評価報告書（平成16年度）」をまとめ、引き続いて今年度も「白梅学園大学自己点検評価報告書（平成17年度）」を作成しました。授業アンケートについても昨年度完全実施に踏み切ったことを受けて、前期と後期に実施し、結果について学生に報告をしました。自由記述欄については全て電子データ化して教員に返却し、より客観的に授業を評価できるように工夫しています。

授業アンケート実施状況 （実施授業科目数）

前期 6／12～6／17

後期 11／27～12／1

6. 学生人権擁護

例年通り、年度当初のオリエンテーション時に、全学年に「セクシャル・ハラスメント防止ガイドライン－相談の手引き－」を配布し、人権についての注意を喚起しました。「セクシャル・ハラスメントに関する調査」（平成16年度実施）の集計結果と検討課題については、平成17年度に学生向け報告書として配布され、平成16年度はこれを教職員向け報告書として作成することが課題となっていましたが、実現に至りませんでした。

7. 就職及び進学の支援

進路指導課では、学生の進路（就職・進学）支援に対して、進路ガイダンスの実施や進路相談をおこなっています。就職に関する資料等の情報提供のための第1、第2、進路資料室の充実をはかっています。

8. 図書館の整備・活動

平成18年度図書館は、4月から従来9時30分の開館時間を学生の要望を考慮し、授業開始時間と同じく9時開館に変更しました。

また、研究発表準備・演習・実習対応を考慮し貸出期間と冊数を、学生は2週間7冊から2週間10冊に、教職員は、1ヶ月10冊を3ヶ月30冊へと変更しました。

さらに、新聞の購読を東京新聞・日本経済新聞の2紙増やしました。このため、備品として、新聞書架を購入設置しました。

夏季休暇期間には、地下南中央側一部に電動書架を設置し、今後の図書・資料収集の増加対策を行いました（平成16年度に続くⅡ期工事）。また、利用者の安全のため1階・地下の閲覧机の両側にある書架の一部に、耐震用のブックキーパーを付け環境整備しました。電動書架設置に伴う配架については、1階と地下の配架の見直しを行い、1階に配架していたNDC分類の歴史を地下に移し、NDC分類の社会福祉・老人問題等の図書資料を、福祉援助学科学生の利便性を考慮し別置配架としました。

図書の遡及については、約1,900冊の教養科の図書の遡及を実施しました。図書館システム「情報館」のバージョンアップ（ver.5からver.6）を行いました。館報、花みづき20号を発行しました。

9. 情報処理センターの活動

平成18年度もコンピュータ教育のための研究と実践活動に力を入れるとともに、情報化に対応したコンピュータ利用環境の整備のために、コンピュータ、ネットワーク機器、ソフトウェアの維持・管理・更新に勤めました。具体的には、老朽化の激しかったコンピュータ室のカラープリンタ及びネットワークスキャナサーバを新しいものに更新しました。対外的には、社団法人私立大学情報教育協会の業務に、短大部門の運営委員として参加し、大学における情報教育の普及に協力しました。

また、「第6回白梅コンピュータアートコンテスト」を実施し、「白梅学園大学・短期大学情報教育研究」第10号を刊行しました。

10. 教育・福祉研究センター

教育・福祉研究センターは研究の推進および地域サービスをめざして次の事業を実施しました。

（1）平成18年度研究助成

特定課題研究 大学「子どもと現代」短期大学「家族と社会」を含め、以下の13件、550万円（内50万円が学術研究振興資金より助成）で取り組みました。

決定者（申請代表者名）及び助成額

- ①鈴木慎一朗（子どもと現代）「保育者養成機関における男子学生への声楽指導の在り方」
[24.2万円]
 - ②荻野七重「言語連想における時代的変化の検討－幼児について－」[19.8万円]
 - ③小保方晶子「中学生非行傾向行為のリスク要因・教師の視点からの検討」[31.9万円]
 - ④佐々加代子（子どもと現代）「幼稚園における発達臨床型保育内容研究」[44万円]
 - ⑤民秋言「地域において家族が利用できる保育サービスの組織的把握」[13.2万円]
 - ⑥土川洋子「介護福祉士養成校における精神障害者介護の教育のあり方に関する研究～精神障害者ホームヘルプの実態から～」[48.4万円]
 - ⑦佐野英司「福祉実践のあり方についての研究－獲得目標と福祉実践の関わりをめぐって－」[11万円]
 - ⑧中山正雄「乳児院・児童養護施設における家族再統合への取り組みと家庭支援専門相談員の役割の確についての調査及び働き方モデル作成研究（17年度の調査研究をさらに発展研究するもの）」[53.9万円]
 - ⑨瀧口優（子どもと現代）「公立小学校英語教育特区の分析から見た学童期の英語教育」
[12.1万円]
 - ⑩林薰（子どもと現代）「大学における親準備性教育のための基礎的研究－高大連携の家庭科教育の検討から－」[12.1万円]
 - ⑪山路憲夫「『だれもがともに』サポータープロジェクト－地域の医療機関、NPO、親の会との協働により発達障害児を支援する人材養成－」[100万円]
 - ⑫佐々加代子「子育て広場を介し地域と学生を繋ぐ短大教育－学内7種の広場の連携とともに、学生が企画する地域との交流を通して－」*
 - ⑬金田利子「子育て支援ネットワークづくりに関する研究」[150万円]（50万円が学術研究振興資金より助成）
- *⑫「子育て広場」は平成18年度「特色ある大学教育支援プログラム」に採択され途中より除外された。

（2）研究年報

「研究年報」第11号を発刊しました。（平成18年7月31日）

（3）公開講座開催報告

- ◇第8回生活の中のカウンセリング 「子どもとかかわる人のメンタルヘルス」
全5回 講師名：無藤隆、林潔、若木純子、岸田博、平木典子
参加者数：355名 会場：白梅学園大学
- ◇2006年度 第6回保育フォーラム 「豊かな子育てのための社会のあり方を考える」
日程：2006年6月17日（土）
講師名：無藤隆、村越正則、民秋言ほか
参加者数：174名 会場：財）津田塾会
- ◇白梅連続講座「だれもがともに」発達障害児・気になる子たちを考える

全3回 講師名：加我牧子、無藤隆、杉山貴洋、大島美智

参加者数：190名 会場：白梅学園大学

◇第3回 こだいらNPOセミナー

日程：2006年7月8日（土）

テーマ：「大学生と市民活動の出会いの場 IN 白梅」

参加者数：133名 会場：白梅学園大学

◇第3回家庭科の保育と保育者養成の保育をつなぐシンポジウム

「親性準備性教育」について考える

日程：2006年10月7日（土）

講師名：安部富士男、牧裕子、岩塚美鈴、小清水貴子

コーディネーター：金田利子

参加者数：45名 会場：白梅学園大学

◇第12回白梅保育セミナー

日程：2006年12月3日（日）

テーマ：いま保育に問われていること

「認定こども園とこれからの保育」

講演1 講師名：無藤隆

講演2 講師名：村山祐一

分科会①講師名：八木紘一郎「劇活動の指導の仕方」

②講師名：鈴木慎一朗「子どもの声と保育者の声」

③講師名：佐久間路子「子どもを見る目－保育者と保護者の子ども理解をつなぐために－」

④講師名：鈴木佐喜子「子ども・親とともに創る保育」

参加者数：145名 会場：白梅学園大学

◇第5回 白梅介護福祉セミナー

日程：2007年2月4日（日）

テーマ：地域ケアと改正介護保険－住みなれた地域で暮らし続けるために－
シンポジウム

講師名：安達智則「地域をどうとらえるか－地域分析と行改正」

講師名：安井浩一郎「地域包括支援センターの始まりと地域の変化」

講師名：新田國夫「在宅療養支援の医療機関の広がりと地域ケアの課題」

講師名：塩野谷高司「小規模多機能サービスからみた地域介護の質」

分科会「政策から地域ケアのまちづくり（総合的にコミュニティをみる）」

「地域包括支援センターの役割と地域ケアシステムの再編」

「医療・福祉・介護から、地域の紡ぎ合い」

「地域介護の総合力・サービスの質をいかに高めるか」

参加者数：51名 会場：白梅学園大学

（4）発達・教育相談室

発達障害研究を専門とする教員を中心に、白梅幼稚園からの相談や近隣小学校保護者からの相談に応じるなど、教育相談と発達援助の活動を行いました。ただし、今年度は、從

来担当教員の負担が相当な過重になっていたことから、外部への積極的な呼びかけはせず、次年度に向けての相談体制作りについて相談員による会議が重ねられました。次年度からは、子ども学研究所の研究活動の一環としても組み込まれ、新たな出発となる予定です。

(5) 子育て広場委員会

本プロジェクトが文部科学省平成18年度「特色ある大学教育支援プログラム」(短期大学士課程)に採択されました。プロジェクトには白梅学園大学学生も参加し、7つの広場の取組と学園祭、ゼミナール研究発表会、子育て広場シンポジウムでの学生による成果発表が行われました。

採択取組名称

「子育て広場を介し地域と学生を繋ぐ短大教育－学内7種の広場の連携をもとに、学生が企画する地域との交流を通して－」平成18年度は本取組に5,651千円が補助交付されました。

表1) 平成18年度学生在籍数 (平成19年3月1日現在)

(人数：名)

学 科	学 年	人 数
子ども学部子ども学科	1 年	133
	2 年	147
合 計		280

表2) 平成19年度新入学生数 (前年度比較) (平成19年4月1日現在)

(人数：名)

学科 \ 年度	平成18年	平成19年	増 減
子ども学部子ども学科	133	133	0

〔III〕 白梅学園短期大学

1. 教学・教務に関する執行状況

(1) 4年制大学の開設2年目に当たり、子ども学部と短期大学3学科1専攻科の一体的な活動を心がけ、とくに単位互換や他科聴講など教務的面での相互関係及び、共有することの多い諸設備の改修などでの両者の関係に目配りをしながら、学長のもとに整備した執行部が中心となって学事の円滑な進行を心がけました。

(2) 学長、副学長、教務部長、学生部長、募集対策副本部長からなる執行部会議を毎週定期化し、保育科の定員増、短期大学の4年制化、大学院構想、付属幼稚園舎の改築など、将来設計に関わる構想の具体化に向けて検討を重ね、法人とも連携し、スケジュール化を進めました。

(3) 保育科の定員増に関しては、必要な申請手続きを順調に進め、12月の実地調査を経て正式な認可を得ることができました。実地調査に関しては、とくに大きな留意事項はありませんでしたが、定員超過に対する厳しい指導はこれまでと同様であり、入試方法等の改善により対処する必要があります。

(4) 地域に開かれた大学をめざす取り組みもさらに強め、「子育て広場」の活動をさらに活発化するとともに、学生参加のシステムも整えた結果、「特色ある大学教育支援プログラム」に採択され、さらに活動を活発化する裏づけを得ました。

また、小平市をはじめとする地域の福祉、教育活動への学生ボランティア活動や子育て支援事業、特別支援教育事業への学生の参加を、ゼミナールやインターンシップ等を積極的に取り入れて進めました。

さらに、本学の教育を広く地域に発信する活動の一環として、公開講座の開設や科目等履修による授業の開放、あるいは他大学等の教育機関との連携による単位互換を進め、とくにネットワーク多摩が推進する高校生対象のチャレンジキャンパスプログラムには積極的に参加しました。

(5) 多様なニーズに応えるための豊かな教育内容や、それをプランニングし実践する教職員スタッフの能力の向上が求められる中、教育方法や実務能力を高めるためのFD、SDの取り組みを行いました。FDに関しては、他大学での実践事例の報告会などを3回にわたって実施し、全教員の参加を求めました。

(6) 自己点検・評価への社会の注目が高まっている趨勢に鑑み、とくに平成19年度を目標に据えた第3者評価への準備作業のために、自己点検・評価委員会を中心に今年度以降の点検・評価のスケジュール化と個々の部署の役割分担を明確化し、取り組みの態勢を整え、実行に移しました。また、教学部門の自己点検の軸となる授業評価については、全授業での完全実施を実現しました。

(7) 各種実習に関する業務を統括し、また実務を担う組織である、実習指導センターの整備充実をはかりました。専任事務体制を確立するとともに、実習講師人数も増やし、各種実習の円滑な指導に力を注ぎましたが、とくに指導スタッフの数的整備がまだ課題として残されています。

(8) 短期大学及び大学の諸組織、諸設備等の将来像を検討するためのワーキンググループからの答申をうけて、とくに、大学院開設、付属幼稚園の園舎建設を含む将来構想、教育・福祉研究センターの改編計画と研究所設置などの具体化を進めましたが、とりわけ短

期大学として焦眉の急である各科の4年制大学科に向けての構想づくりにウエイトを置いて検討を進め、概括的な方針と準備作業のための委員会の組織化を図りました。

2. 教務・学生関係

(1) 学生数

平成18年度は1年生（3学科・専攻科）277名、2年生（3学科）287名、総学生数564名でスタートしました。

(2) 教育課程と教務事項

①学事日程の編成と授業週数の確保

平成18年度も従来と同様の学事日程で教育活動がスタートしましたが、8月に開催された厚生労働省関東地方厚生局の養成施設連絡会議では、授業回数の15回確保が大きな課題の一つとして出されました。その結果、その対応に追われる状況となり、授業運営上、問題を残すこととなりました。実習実施期間や学事日程等の抜本的見直しが喫緊の課題となっています。

②授業方法の改善と教育機器等の環境整備

より効果的な授業方法等を目指してFD等の取り組みがなされ、情報機器等を活用した授業展開の工夫が取り組まれています。他方、教育機器等の更新や設備改修の面での遅れが目立ってきており、重点的な対策が求められてきています。

③適正な入試の実施について

今年度初めは、前年度後期（平成18年1月～3月）に実施された入試問題での出題ミス等についての、訂正及び是正措置などの対応を集中的に行うこととなりました。是正措置として検討されたミス防止対策では、内部チェック体制の充実と併せて、外部機関へのチェック委託が採用され、実施に移されました。また、これら出題ミスは、一部の出題担当者への過大な負担などが原因となっていると考えられ、それらに対する抜本的な対策が検討されねばならず、今後の課題として残されています。

④科学研究費採択と事務管理体制の整備

ここ数年、徐々にではあるが科学研究費をはじめとする、いわゆる「競争的資金」の採択が増えつつあります。平成18年度は新規採択が3件ありました。今後もさらに申請件数、採択件数の増大を目指していくとともに、「公的研究費」の機関管理のルールや体制の確立が急がれています。

(3) 学生生活の支援

近年、心身の不健康な学生、深刻な問題を抱える学生が増加しており、保健センター室、学生相談室の果たす役割はますます大きくなっています。

保健センター室は、救急処置・保健指導・健康相談の他に栄養指導・性教育等の健康教育を実施し、学生相談室は学園生活についてのあらゆる相談に応じました。相談内容により医療機関との連携を必要とするケースも増えています。

保健センター運営委員会主催による「心と体のセミナー」（プロによる集団運動教室、個別運動相談、栄養相談）を今年度は3回実施しました。管理栄養士による栄養相談を1回実施しました。学生の健康に関する自主管理を促すものとして実績を上げています。

〈保健センターの利用状況〉

・救急処置	849件	・健康相談	403件	・健康教育	372件
・その他	92件				
合計	1,716件				

〈学生相談室の相談内容別利用件数〉

・適応障害	623件	・対人関係	47件
・家族問題	21件	・自己啓発	8件
・進路相談	11件	・親の利用	19件
合計	729件		

学生生活の支援に関しては、昨年度実施した「学生生活アンケート」の結果をもとに、そこで明らかとなった問題点、あるいは学生からの様々な要望に応えて、対応できることから順次取り組みました。

学生寮（若葉寮）については、寮生の自主自立を基にした共同生活の確立をめざす必要性を感じ、寮生との話し合いを通しその指導に配慮しました。

学報「プラムタイムス」（9月、3月刊行）は後援会員や同窓会全国支部にも発送され学園の近況報告とともに情報交換の場にもなっています。

学資の援助を必要とする学生が昨年度に続いて増加し、今年度奨学金の受給者は155名でした。

〈在籍数に対する奨学生の割合動向〉

平成14年 13% 15年 15% 16年18% 17年21% 18年27%

3. 学生募集

（1）志願者数の状況について

今年度は、18歳受験人口が本格的な減少期に入っている中、四年制大学志向がさらに強くなっていることと相俟って、志願者確保には厳しい状況が予想されました。このような中、短期大学では、きめの細かい広報活動と共に指定校枠の見直し、HPの活用などで募集基盤の拡大を図る一方、四年制子ども学科との相乗作用を意図した連携、日程の増加や地方試験の実施による機会拡大などを行いました。

その結果、短期大学の志願者総数は672名（第2志望を含み、専攻科を除く）を確保し、前年から1.2ポイントの微増となりました。

保育科は、521名の志願者があり、前年から14ポイントアップの80名増でした。これは、Ⅲ期までの入学試験を実施して受験機会の拡大を図ったこと、期中に100名から130名への定員増が認められたことが寄与しています。短期大学は推薦と一般入試の募集比率の枠組みがないため、相当数を推薦系入試で確保することができました。なお、公募制推薦入試の倍率は2倍でした。一般入試は、Ⅱ期およびⅢ期入試の設定に伴う志願者増加がありました。ただ、推薦入試で相当数を確保し募集枠が減少した影響で、子ども学科の第2志望が含まれるもの、各期ともかなりの高倍率となりました。ここからも保育科に対する一定の需要はまだ根強いものがあると推察されます。今後の募集戦略は、指定校の見直し、四年制大学子ども学科との棲み分けや差別化も検討の要があります。なお、新入学者は131名で厚生労働省の定員超過率に関する厳しい指導に沿った形でおさめることができました。

福祉援助学科の志願者総数は69名で前年と同数でした。指定校推薦は5名増なので、枠を倍増させた成果が現れています、しかし、志願者総数は、一昨年との比較で37.8%の減少であり、中期的には減少傾向が続いていると云えます。とりわけ、一般入試の志願者が少ないと云えます。福系の志願動向は一般には景況感に左右されやすいと云われますが、その影響も看過できません。今後は、専門学校との競争もさらに熾烈になるので、志願者増にはあらたなパラダイムが必要と考えられます。

心理学科の志願者総数は、前年の154名から72名減の82名と大幅な減少となりました。これは、一般入試で子ども学科第2志望の心理学科選択が激減したことが大きいです。心理学科から子ども学科への編入が事実上出来ないことが周知されたことも一因としてあげられます。しかし、志願者の高校所在地の分布は全国展開しているので、短期大学での心理学科というユニークさは依然維持していると認識しています。ただし、四年制大学志向が強まる中で、他大学心理学系統の入学易化が進んだことも事実であり、将来像については検討すべき時期に来ていると考えられます。

専攻科については、前年度に引き続き、志願者数、合格者数とも減少する結果となりました。基層をなす保育科定員増というプラス要因はあるものの、志願者増は予断を許さない厳しい状況が想定されます。

(2) 制作物について

メインの制作物である年度版「ガイドブック」は、訴求点が異なる部分もあり四大版と短大版をそれぞれ独立の冊子として制作しました。配布先は高校、生徒、予備校、同窓会員などでしたが、その一方WEB媒体を介した直接請求も増加しつつあります。

(3) ホームページについて

本学は、四年制大学、短期大学、高等学校、清修中学校、幼稚園が並立する構成であり、総合的な教育機関として全容が把握できる構成となっています。短期大学ページにおいては、適時に行事告知を実施するなどし、また更新頻度の向上に努めました。

(4) 相談会・高校内ガイダンス・出張講義について

多くの教職員の協力を得て、会場相談会、高校内ガイダンス、出張講義等に積極的に参加し、直接、受験生に説明する機会を重視する姿勢で取り組みました。また、本学独自の高校教員向け相談会を立川、新宿、横浜、大宮の四会場で実施しました。

(5) 高等学校・予備校訪問について

プロパーによる高校訪問は、地方入試の実施を踏まえ、東日本のかなり広範な地域をカバーしました。また、教職員の応援を得て、全学的な高校訪問を5月～6月、11月の2回にわたり実施しました。この2回の大掛かりな高校訪問は、首都圏「進学校」を中心とした四大志願者の基盤拡大を意図したものでしたが、11月の訪問では保育科の定員増を踏まえた短期大学志願層の掘り起こしにも寄与しました。昨年同様、首都圏を中心とした予備校訪問も実施しました。

(6) オープンキャンパスについて

近年はオープンキャンパス参加を授業の一環とする高校もあり、募集関連行事としての比重はますます高まっています。また、数年来保護者同伴の参加も増加の一途です。これに呼応し、体験授業や予備校講師による入試対策講座、現職による職業理解の講演を企画するなど、内容上の工夫を図りました。また、学生サポーターによる体験談や学内ツアーなど、従来以上に学生参加型のオープンキャンパス運営を目指しました。

(7) 白梅学園高校との関係

併設高校と協同した、一年生対象の施設見学会、二年生対象の体験授業、保護者向説明会などを実施しました。また、特別推薦合格者に講義形式の講座を1月中に3回開催し、さらに保育系の合格者については「子育て広場」イベントへの参加、福祉系にはボランティア活動への参加、心理学系には自習課題を義務付け、実践的な入学前指導を行いました。

今後も、白梅学園高校生への施設見学会実施やチャレンジキャンパスへの受け入れを積極的に行い、総合学園として一貫性のある連携指導をさらに充実させていく必要があると思われます。

4. 事務組織の改善

事務部門では、平成18年度は、特に短大保育科の定員増申請、保育士養成施設及び介護福祉士養成施設の指定基準の遵守の確認、大学改革推進等補助金はじめ経常費補助金確保のための申請、自己点検評価報告書作成、短大50周年に向けた企画準備などを行いました。大学事務職員の資質向上のための取り組みとしては、各部署ごとに関連の研修会に積極的に参加し研鑽に励みました。学内では、キャリアアドバイザーの資格をもつ進路指導課長に講師をお願いし、大学職員また社会人としての基本的な姿勢について学びました。

5. 自己点検・評価

昨年度「白梅学園短期大学自己点検評価報告書（平成16年度）」をまとめ、引き続いて今年度も「白梅学園短期大学自己点検評価報告書（平成17年度）」を作成しました。平成19年度に第三者評価を受けるに当たって、現在平成18年度の報告書を作成中です。授業アンケートについても昨年度完全実施に踏み切ったことを受けて、前期と後期に実施し、結果について学生に報告をしている。自由記述欄については全て電子データ化して教員に返却し、より客観的に授業を評価できるように工夫している。

授業アンケート実施状況 （実施授業科目数）

前期 6／12～6／17

後期 11／27～12／1

6. 学生人権擁護

例年通り、年度当初のオリエンテーション時に、各科全学年に「セクシャル・ハラスメント防止ガイドライン－相談の手引き－」を配布し、人権についての注意を喚起しました。「セクシャル・ハラスメントに関する調査」（平成16年度実施）の集計結果と検討課題については、平成17年度に学生向け報告書として配布され、今年度はこれを教職員向け報告書として作成することが課題となっていましたが、実現に至りませんでした。

7. 就職及び進学の支援

今年度の求人件数は、企業関係が686件、保育所が359件、幼稚園が299件、施設関係が544件と全てを合わせ1,888件あり、卒業生数277人に対して高い求人件数があり、白梅はまづまずの就職環境でした。そのため、就職率は、保育科が98%、心理学科が93.9%、福祉援助学科・専攻科福祉専攻がいずれも100%とよい結果となりました。心理学科では、刑務

官B（国家公務）や栃木県警察（地方公務）などへの就職がありました。就職決定率は、昨年度に比較して28%もアップしました。

また、進学では47名が進学しました。編入については、45大学から指定校の依頼がありました。4年制へ編入した学生は18名でした。本学の専攻科福祉専攻へ9名、専門学校他へ20名が決定しました。

進路指導課では、学生の進路（就職・進学）支援に対して、自己分析をはじめ、自立した社会人を目指すための講座などガイダンスの実施やキャリアについての不安や悩みについては、キャリアカウンセリングなども取り入れ、資料や情報提供のための資料室の充実をはかっています。専任教員による英語や論文の個別指導もおこないました。

8. 図書館の整備・活動

平成18年度図書館は、4月から従来9時30分の開館時間を学生の要望を考慮し、授業開始時間と同じく9時開館に変更しました。

また、研究発表準備・演習・実習対応を考慮し貸出期間と冊数を、学生は2週間7冊から2週間10冊に、教職員は、1ヶ月10冊を3ヶ月30冊へと変更しました。

さらに、新聞の購読を東京新聞・日本経済新聞の2紙増やしました。このため、備品として、新聞書架を購入設置しました。

夏季休暇期間には、地下南中央側一部に電動書架を設置し、今後の図書・資料収集の増加対策を行いました（平成16年度に続くⅡ期工事）。また、利用者の安全のため1階・地下の閲覧机の両側にある書架の一部に、耐震用のブックキーパーを付け環境整備しました。電動書架設置に伴う配架については、1階と地下の配架の見直しを行い、1階に配架していたNDC分類の歴史を地下に移し、NDC分類の社会福祉・老人問題等の図書資料を、福祉援助学科学生の利便性を考慮し別置配架としました。

図書の遡及については、約1,900冊の教養科の図書の遡及を実施しました。図書館システム「情報館」のバージョンアップ（ver.5からver.6）を行いました。館報、花みづき20号を発行しました。

9. 情報処理センターの活動

平成18年度もコンピュータ教育のための研究と実践活動に力を入れるとともに、情報化に対応したコンピュータ利用環境の整備のために、コンピュータ、ネットワーク機器、ソフトウェアの・維持・管理・更新に勤めました。具体的には、老朽化の激しかったコンピュータ室のカラープリンタ及びネットワークスキャナサーバを新しいものに更新しました。対外的には、社団法人私立大学情報教育協会の業務に、短大部門の運営委員として参加し、大学における情報教育の普及に協力しました。また、「第6回白梅コンピュータアートコンテスト」を実施し、「白梅学園大学・短期大学情報教育研究」第10号を刊行しました。

10. 教育・福祉研究センター

教育・福祉研究センターは研究の推進および地域サービスをめざして次の事業を実施しました。

(1) 平成18年度研究助成

特定課題研究 大学「子どもと現代」短期大学「家族と社会」を含め、以下の13件、550万円（内50万円が学術研究振興資金より助成）で取り組みました。

決定者（申請代表者名）及び助成額

- ① 鈴木慎一朗（子どもと現代）「保育者養成機関における男子学生への声楽指導の在り方」[24.2万円]
 - ② 荻野七重「言語連想における時代的変化の検討－幼児について－」[19.8万円]
 - ③ 小保方晶子「中学生非行傾向行為のリスク要因・教師の視点からの検討」[31.9万円]
 - ④ 佐々加代子（子どもと現代）「幼稚園における発達臨床型保育内容研究」[44万円]
 - ⑤ 民秋言「地域において家族が利用できる保育サービスの組織的把握」[13.2万円]
 - ⑥ 土川洋子「介護福祉士養成校における精神障害者介護の教育のあり方に関する研究～精神障害者ホームヘルプの実態から～」[48.4万円]
 - ⑦ 佐野英司「福祉実践のあり方についての研究－獲得目標と福祉実践の関わりをめぐって－」[11万円]
 - ⑧ 中山正雄「乳児院・児童養護施設における家族再統合への取り組みと家庭支援専門相談員の役割の確についての調査及び働き方モデル作成研究（17年度の調査研究をさらに発展研究するもの）」[53.9万円]
 - ⑨ 瀧口優（子どもと現代）「公立小学校英語教育特区の分析から見た学童期の英語教育」[12.1万円]
 - ⑩ 林薰（子どもと現代）「大学における親準備性教育のための基礎的研究－高大連携の家庭科教育の検討から－」[12.1万円]
 - ⑪ 山路憲夫「『だれもがともに』サポータープロジェクト－地域の医療機関、NPO、親の会との協働により発達障害児を支援する人材養成－」[100万円]
 - ⑫ 佐々加代子「子育て広場を介し地域と学生を繋ぐ短大教育－学内7種の広場の連携をもとに、学生が企画する地域との交流を通して－」*
 - ⑬ 金田利子「子育て支援ネットワークづくりに関する研究」[150万円]（50万円が学術研究振興資金より助成）
- *⑫「子育て広場」は平成18年度「特色ある大学教育支援プログラム」に採択され途中より除外された。

(2) 研究年報

「研究年報」第11号を発刊しました。（平成18年7月31日）

(3) 公開講座開催報告

◇第8回生活の中のカウンセリング 「子どもとかかわる人のメンタルヘルス」

全5回 講師名：無藤隆、林潔、若木純子、岸田博、平木典子

参加者数：355名 会場：白梅学園大学

◇2006年度 第6回保育フォーラム 「豊かな子育てのための社会のあり方を考える」

日程：2006年6月17日（土）

講師名：無藤隆、村越正則、民秋言ほか

参加者数：174名 会場：財) 津田塾会

◇白梅連続講座「だれもがともに」発達障害児・気になる子たちを考える

全3回 講師名：加我牧子、無藤隆、杉山貴洋、大島美智

参加者数：190名 会場：白梅学園大学

◇第3回 こだいらNPOセミナー

日程：2006年7月8日（土）

テーマ：「大学生と市民活動の出会いの場 IN 白梅」

参加者数：133名 会場：白梅学園大学

◇第3回家庭科の保育と保育者養成の保育をつなぐシンポジウム

「親性準備性教育」について考える

日程：2006年10月7日（土）

講師名：安部富士男、牧裕子、岩塚美鈴、小清水貴子、

コーディネーター：金田利子

参加者数：45名 会場：白梅学園大学

◇第12回白梅保育セミナー

日程：2006年12月3日（日）

テーマ：いま保育に問われていること

「認定こども園とこれからの保育」

講演1 講師名：無藤隆

講演2 講師名：村山祐一

分科会①講師名：八木紘一郎「劇活動の指導の仕方」

②講師名：鈴木慎一朗「子どもの声と保育者の声」

③講師名：佐久間路子「子どもを見る目－保育者と保護者の子ども理解をつなぐために－」

④講師名：鈴木佐喜子「子ども・親とともに創る保育」

参加者数：145名 会場：白梅学園大学

◇第5回 白梅介護福祉セミナー

日程：2007年2月4日（日）

テーマ：地域ケアと改正介護保険－住みなれた地域で暮らし続けるために－

シンポジウム

講師名：安達智則「地域をどうとらえるか－地域分析と行改正」

講師名：安井浩一郎「地域包括支援センターの始まりと地域の変化」

講師名：新田國夫「在宅療養支援の医療機関の広がりと地域ケアの課題」

講師名：塩野谷高司「小規模多機能サービスからみた地域介護の質」

分科会「政策から地域ケアのまちづくり（総合的にコミュニティをみる）」

「地域包括支援センターの役割と地域ケアシステムの再編」

「医療・福祉・介護から、地域の紡ぎ合い」

「地域介護の総合力・サービスの質をいかに高めるか」

参加者数：51名 会場：白梅学園大学

(4) 発達・教育相談室

発達障害研究を専門とする教員を中心に、白梅幼稚園からの相談や近隣小学校保護者からの相談に応じるなど、教育相談と発達援助の活動を行いました。ただし、今年度は、従来担当教員の負担が相当な過重になっていたことから、外部への積極的な呼びかけはせず、次年度に向けての相談体制作りについて相談員による会議が重ねられました。次年度からは、子ども学研究所の研究活動の一環としても組み込まれ、新たな出発となる予定です。

(5) 子育て広場委員会

本プロジェクトが文部科学省平成18年度「特色ある大学教育支援プログラム」（短期大学士課程）に採択されました。プロジェクトには白梅学園大学学生も参加し、7つの広場の取組と学園祭、ゼミナール研究発表会、子育て広場シンポジウムでの学生による成果発表が行われました。

採択取組名称

「子育て広場を介し地域と学生を繋ぐ短大教育－学内7種の広場の連携をもとに、学生が企画する地域との交流を通して－」平成18年度は本取組に5,651千円が補助交付されました。

表1) 平成18年度学生在籍数 (平成19年3月1日現在) (人数：名)

	学 年	人 数
保 育 科	1 年	110
	2 年	125
	計	235
心 理 学 科	1 年	71
	2 年	68
	計	139
福祉援助学科	1 年	63
	2 年	80
	計	143
専 攻 科	福祉専攻 1 年	22
合 計		539

表2) 平成18年度卒業者および免許資格取得者数

平成18年度3月卒業者（平成19年3月15日）

	学科および種別		人 数
卒業者数	本科	保育科	122
		心理学科	60
		福祉援助学科	74
	専攻科	福祉専攻	20
	計		276
資格取得者数	指定保育士養成施設卒業証明書取得者		117
	幼稚園教諭二種免許状		115
	介護福祉士登録資格		91
	ホームヘルパー養成研修2級課程修了証書取得		18
	生きがい情報士認定証取得		1
	ピアヘルパー認定試験合格		20

表3) 平成19年度新入学生数(前年度比較)(平成19年4月1日現在)

(人数:名)

		平成18年	平成19年	増減
保育科		110	131	21
心理学科		78	64	△14
福祉援助学科		65	61	△4
専攻科	福祉専攻	22	15	△7
計		275	271	△4

表4) 平成18年度卒業生 就職者数

(人数:名)

		白梅学園短期大学						合計	
		本科				計	福祉専攻		
		保育科	福祉援助学科	心理学科					
A	卒業・修了者 数[C+E+F]	123	74	60	257	20	20	277	
B	就職希望者数	99	53	33	185	19	19	204	
C	就職者数	97	53	31	181	19	19	200	
D	就職決定率 [C/B×100]	98.0%	100.0%	93.9%	97.3%	100.0%	100.0%	98.0%	
	前年度決定率	97.3%	100.0%	65.7%	93.9%	100.0%	100.0%	94.4%	
E	進学者数	15	13	19	47	0	0	47	
F	その他	11	8	10	29	1	1	30	

* 上表には平成17年9月卒業者を含みます(福祉援助学科3名)

表5) 平成18年度卒業生 就職者業種・職種別 内訳

	業 種	職 種	白梅学園短期大学						業種別 職種合計	
			本 科				本科計	福祉専攻	専攻科計	
			保育科	福祉援助学科	心理学科					
企業・公務関係	建設					0		0	0	
	製造	事務	3	1	4	8		0	8	
	ガス					0		0	0	
	情報通信	事務			1	1		0	1	
	運輸					0		0	0	
	卸売・小売	事務	1		4	5		0	5	
		営業・販売	4	2	5	11		0	11	
	金融・保険	事務			2	2		0	2	
	不動産	事務			2	2		0	2	
	飲食店・宿泊	接客・サービス				0		0	0	
		販売				0		0	0	
	医療・福祉	事務・受付			2	2		0	2	
		リハビリ助手				0		0	0	
		看護助手				0		0	0	
		ヘルパー			1	1		0	1	
	教育・学習支援	事務		1	1	2		0	2	
		営業・販売			2	2		0	2	
	サービス	事務	1			1		0	1	
		営業・販売	2	2	2	6		0	6	
		エステティシャン			3	3		0	3	
	国家公務				1	1		0	1	
	地方公務		1		1	2		0	2	
	小 計		12	6	31	49	0	0	49	
保育関係	公立幼稚園					0		0	0	
	私立幼稚園	幼稚園教諭	41			41	4	4	45	
		臨時教諭				0		0	0	
	公立保育園	保育士	3			3	1	1	4	
		臨時保育士	2			2	2	2	4	
	私立保育園	保育士	35			35	8	8	43	
		臨時保育士	4			4	1	1	5	
	小 計		85	0	0	85	16	16	101	
施設・福祉関係	公立施設等	指導員				0		0	0	
		介護福祉士				0		0	0	
	私立施設等	保育士				0		0	0	
		臨時保育士				0		0	0	
		指導員	1			1		0	1	
		介護福祉士		46		46	3	3	49	
		小 計		0	47	0	47	3	50	
総合計			97	53	31	181	19	19	200	

*上表には平成17年9月卒業者を含みます（福祉援助学科3名）

〔IV〕 白梅学園高等学校

平成18年度は、1年生268名、2年生335名、3年生316名、生徒数919名で出発しました。教職員は、専任45名、非常勤講師36名、事務職員8名（5+3）で教育に当たりました。募集状況においては、17年度に内申の基準を下げないこと、自己推薦で取る生徒の枠を少なくするなどの募集結果、質の向上はできましたので、人数的には学則定員の変更もありましたが、少なくとも300を取るべく細やかな募集活動を行ってきましたが、レベルの高い層の併願者の歩留りが悪く結果的には264名の入学者となりました。前年度に引きつづき日常の教育面での生活・学習の指導や、40,41期生の進学実績なども認められ、外部の一定の評価は得られてきています。

I 学校運営

通常の教育活動は、各分掌の担当者により順調に学校運営を進めることができました。通常の分掌部のほかに当面する緊急の課題解決を目的として設置した、特別委員会も更に充実いたしました。学校改革について、目に見える学力の向上をめざし、授業の充実、生活面での指導の統一の徹底、生徒の自主性のある行事への取り組みの指導、教員の学内・学外の研修等を実施いたしました。全体で確認している教育目標の日々の教育実践の中で一歩一歩成果も上がってきました。特に18年度入学の43期生の特進コースでの偏差値の向上は著しく、引きつづきの指導結果が期待されます。また、募集上レベルアップを計った結果もあり、生活指導上の問題は1, 2年ともほとんどなく、退学者数も1年3名、2年6名、3年2名にとどまりました。41期生の進学実績も好調で国立、早慶などに合格しました。

1. 教務・学習指導

(1) 学習指導の充実

学習指導担当者を中心によりよい授業、生徒の学力の向上のため、授業計画・方法の検討等を、教科会、教科主任会の充実を計りつつ、全教科統一した取り組みをしてきました。また、清修中学との時程、施設、行事等両者の話し合いも定期的に行い支障なく双方の教育活動は行われました。

①「学力向上」のために進路指導部とも連携をとり、次のことを実施いたしました。

(ア) 1年進路マップ、進研模試（1年3回、2年3回、3年1回）を必須で行ってきました。また河合塾模試（3年7回）を大学受験者（白梅学園大学を含む）に必須化し、結果を1人1人分析し、実力向上をめざしてきました。

(イ) 講習、補習については、成績不振者は指名補習を、受験希望者には夏、冬、春期講習を実施し、3年生入試直前講習をセンター試験対策を目的で実施しました。また夏には校内で3泊4日で勉強合宿を行いました。

(ウ) 生徒の進路先を見すえてモチベーションを高めさせ、学習到達目標の設定、実施、点検を各教科、学年で行なっていました。

②生徒の授業評価による授業の自己点検は、各学期毎に全教科、全クラスで実施いたしましたが質問内容については教科の独自なものを加え、結果の集計はコンピュータ化いたしました。無記名とし、実施時期は二学期中間後に行い期末までの授業に生かせるようにしました。各教科の中で結果を踏まえての議論を深め、意見交換・検討をし、授業の改善の指導に反映してきました。

③進路面談週間を設定しました。1学期は6月に1週間全学年で実施、スタディーサポートの結果を用いて、パソコンを利用した面談を実施、生徒の弱点の強化、学習習慣の定着、進路に向けての取り組みの指導などをしました。

このため担任の研修を業者の方に来ていただいて行いました。

④保護者対象の公開授業を年間行事予定表に入れ、多くの保護者にみていただくようにしました。参観された方からの意見・感想もいただき次への授業、生徒指導に反映することができました。また、土曜日にとの希望が多いため次年度はその方向で考えました。

⑤生徒の力の「のび」について目に見える結果を出すため、18年度も数値で表わした目標を立て、全生徒が確実に向上する取り組みをしてきました。特別選抜コースはかなりの成果がでておりますが進学コースの指導、結果はいま一歩の反省がありました。二年選抜クラスの生徒の意欲を高めさせ、向上させる指導がやや不足でした。次年度に目標を立てて

おります。

⑥総合の時間もオリエンテーション合宿に始まり、コミュニケーション能力の育成、テーマ学習、自己史、職業インタビュー、進路学習等に取り組み充実してきました。

(2) 特別選抜コース発展特別委員会

別枠募集による1年、2年の特別選抜コース（クラスS、クラスG）目的達成と一層の発展のため、各担任の指導、教科の指導の問題点の検討、個々の生徒の問題点や弱点教科など洗い出し、対策を考えてきました。3年（41期）の特進コースに対してはこここの生徒に対しての対策が立てられ、結果がでたと思います。また、1、2年生のS、G、選択クラスの入れ替えなどの検討・指導が学年との関係もあり厳しさに欠けた点が反省されています。この委員会もある一定の方向性がでて、成果もでてきましたので時間内設定の特別委員会から次年度は月一回以上とし、放課後に実施することになりました。

2. 生活指導

教科指導と並んで生活指導、教科外活動（HR、行事、クラブ等）の重要性を認識して、生徒の変化に早く「気づき」、適切な指導を行ってきております。生活指導部長・学年主任を中心に先生方の暖かなきめ細やかな指導により、生活指導の全体において、かなりよい結果になってきております。生徒会主体による学校行事（新入生歓迎会、体育祭、合唱コンクール、白梅祭、弥生祭）は、生徒の自主運営も出来つつありよく取り組んで目的を達成しておりました。生徒の精神面での不安定等の問題傾向もやや落ち着いて来たと思います。また、生徒の服装のだらしなさ、生活面での問題等が募集にも大きく影響をすることも考え、全学年揃った制服の着方（第1ボタン、セーター登校禁止など）茶髪などについての指導を徹底いたしました。

①合唱コンクールは生徒会の合唱委員を中心に早い時期から取り組み、達成感を持たせられる行事として、また合唱の完成度も高く仕上がり、よい結果でした。

②白梅祭については総合の時間と関連させ、各学年テーマを決め取り組みましたが昨年同様生徒側の自主性がいま一歩であったかと思われます。

③カルタ大会は1年生のみの行事となりましたが百人一首を暗記することの学年での指導の取り組みの結果、テストの得点も高く、それにつづいてのカルタ大会もレベルの高いものになりました。

3. 進路指導

総合の時間の取り組みと関連し、一年次より将来の夢を広く、高く設定させ、達成させていくために「職業インタビュー」「先輩の話を聞く会」「白梅学園大学・短大の説明会、見学会」などのイベントを充実させました。職業インタビューでは卒業生などの保育士、美容師、看護師の方々に話を聞き、更に建築家の工藤和子氏、弁護士の長倉澄氏の講演をお願いしました。生徒がさまざまな職業を知り、夢を高く持つきっかけになりました。また、白梅学園大学・短大への希望者のより深い理解のため保護者対象の説明会を実施しました。生徒のためにも無藤学長をはじめ大学・短大の先生方のお話をお聞きしました。

今年度の卒業生41期生は314名がありました。進路状況は別表のとおりですが、白梅学園短大には45名、白梅学園大学には41名、その他の4年制大学には101名が進学をしました。年々4年制大学の進学が上がっており、50%を越えることを目標にいたしましたが結果は昨年とほぼ同じ45.2%となりました。特進コース、進学コース（選抜・文I）の合格実績は国立、難関私大とかなりの成果がでました。

4年制大学進学の上昇は特選コースは当然ですが、進学コースの文I、選抜クラスの他大学受験層を増やしていくことの結果であると思われます。

国公立も推薦でなく一般受験で、東京医科歯科大学、東京外国語大学などの難関大他への合格者もでて、難関私大である早慶理などGMARCH以上の大学、3女子大への合格者も28名となりました。4大進学者の河合塾模試の義務づけやセンター直前対策、生徒の学力分析と受験対策指導などがよい結果に結びついたと思われますが、センター後の受験指導（自宅学習中）、理系進学の強化不足など問題点も残りました。平成18年の反省点を考え、今後生徒間のライバル意識を持たせ、目標を高くし、早い時期からの意識作り、授業担当者、担任・学年集団のチームワーク作りが必須であり、また保護者の意識も高めよ

成果を出していくべき取り組みをしていきたいと思います。

◎白梅学園大学・白梅学園短大の進学について

白梅学園大学進学に関しては選択科目の指定や河合塾模試の義務化など進学後のことも考えての指導や、各自の適性の理解、教師の指導もあり、希望者の早い時期での成績も含めて意志決定率は高くなっています。短大保育希望者の決定率が低いのは成績基準によって進学できない層が多いためと思われます。2.9～3.1程度の評定値の生徒の専門学校を含む他校への進学せざるを得ない者も多く、例年同様に今後の課題となりました。

4. 保健室の充実

中学校設置にともない、中学、高校の保健室が独立しました。共学の大学・短大生との共有で起こっていた問題等は解決しました。二学期に保健室に逃げ込む傾向の生徒が増えたため、保健室への来室手続きの方法などを検討し、変更したため状況はよくなりました。

5. 18年度42期生の修学旅行はオーストラリアシドニー、沖縄・石垣島、屋久島、京都・神戸方面で実施いたしました。大きな問題もなくどのコースも生徒の満足度は高かったとのアンケートの結果がでました。19年度実施の43期生は屋久島が希望者が少なく中止となりました。44期生より三年間の修学旅行の見直しを行い、業者、方面（シドニー、西表・石垣島、四国四万十川・神戸・大阪）が決定しました。

6. その他

①朝読書の実施

朝読書を実施で4年目になりました。朝の10分間の静かな時間の効果は大きなものがありました。時間の確保のためH. Rの前に実施し、ほぼ全員が「本を読む」ことが実行できています。また読んだ本でよいものを図書委員がおたよりで紹介したりしました。

②カウンセリングルームの充実

利用者の増加にともない、週3回開いておりました。精神的な不安定者、問題のある生徒（保護者）の対応に学年とも協力して、解決の方向を模索してきました。不安定な生徒もやや減少しつつあります。

③春実施のイギリスカンタベリーで実施海外語学研修は1、2回が無事に終了しました。参加者1回目32、2回目15名でした。夏実施のニュージーランドは希望者不足のため中止となりました。委員会で説明会の工夫等いたしまして19年度は16名希望で実施できます。

II 生徒募集

募集状況

平成19年度入学生（44期生）は、中学校立ち上げの関係で学則定員を330名として募集を行ってきました。前年度、前々年度と330名を越える入学生をとることができましたが、不登校等問題を抱えている生徒の入学後の問題も多くなりました。そのため自己推薦試験、AⅡ推薦の条件を厳しくし、A推薦の考慮枠を少なくし、レベルの底上げをいたしましたので人数は昨年同様いま一歩という264名の入学生となりました。Gクラスとの併願者の歩留りが悪かったことは、併願校が高くなっているということでもあります。19年度は数を取ることも大事なことでありますので、入試相談、中学との話し合いの中で推薦の考慮枠の巾を広げていくことも考えています。

しかし特選コースS、Gは進学コースの選抜クラスは偏差値も高い第1志望の生徒が集まりましたことは今後の進学実績にも大きくながることと思われます。またランクアップ受験者の人数も大巾に増えました。底上げの生徒の質の向上は不登校等の問題による退学者を減らすことができたと思います。

(1) 募集企画部は、渉外担当を7名おき、募集業務の中心として任務に当たりました。それに加えて、渉外担当協力員を5名置き、学校まわり、入試相談の協力をしました。常に企画部内で情報の交換や、中学校、塾への対応の検討などを細かにしてきました。

(2) 広報活動を充実させ、ポスターを体験入学用、募集・説明会用の2種類、5月にリーフレット、夏休み後に要覧を作成しました。ホームページを新しく変えていくことを重点に置きましたが徐々に更新が早くなり後半は進路行事・学年行事など早く発信するよう

心がけました。

(3) 奨学金制度

昨年度奨学金制度の見直しを行い、特A, A, B基準として適応いたしました。グレードアップ再試験を受ける生徒も多く、この制度を利用して入学する者も多くなり、特選コースの入学者の増加とレベルアップにつながりました。また在校生につき、学校の成績、実力試験の偏差値、生活態度などをもとに支給を止める者、グレードダウン・アップの者など審議し、変更しました。

◎生徒募集における教職員の意識の向上は学校改革の中でももっとも大事なものであります、(土), (日)の説明会、夏休みの体験入学など受験者に“よい学校だ”と思っていただけるよう全員で頑張ってきました。また募集面での事のみでなく日常における生徒への学習・生活の指導、学校の中味の向上に、教育目標の達成、進学実績を上げること、など努力してきました。気を抜かず尚一層の取り組みをしていきたいと思います。

III その他

- 1 平成18年度研修録28号を刊行しました。
- 2 陸上部 下山友里さんがインターハイ、国体に出場し良い成績を修めました。

〔V〕 白梅学園清修中学校

開校初年度、57名の第一期生が入学しました。生徒獲得競争が激化する多摩地区では、既成の学校の進学実績や固定観念で学校選択がなされる傾向が強く残っています。その中で入学生確保を果たす為に、他校にはない斬新な取り組みとその教育活動を通しての在校生・保護者の満足度を高めることが必須条件となります。平成19年度入試に向けては1期生保護者の「口コミ広報」が功を奏し、2期生74名の入学者を確保できたことは、初年度の取り組みが評価され、反映されたものと思います。

1. 学校運営

(1) 教務関連

①シラバス

6年間のグランドシラバスに基づいた年間、タームシラバスを生徒、保護者、塾関連等に配布し、授業のやり方、評価等の情報公開に努めました。

②国語・数学・英語の取り組み

月曜日から金曜日までの午前中、65分授業を実施しました。授業内容を「はじめ」－「なか」－「まとめ」というように毎時の指導案を作成し、指導に当たりました。数学、英語については、1クラスを分割し、きめ細かな指導を行いました。英語検定3級(中卒レベル)4名、4級(中2レベル)30名、数学検定3級4名、4級24名、5級29名。漢字検定は2級(高卒レベル)1名、準2級(高校半ば)1名、3級(中卒)5名という成果を上げています。

③ 社会・理科の取り組み

社会科は電子ボードの利点を最大限活用して、映像やWebを駆使した授業を展開し、生徒の興味関心を高める授業を展開しました。理科は、「生命」ということをテーマに、植物の写生、イワシやイカの解剖、酸性雨や天体など身近な題材を取り上げました。予定していた外部講師を招いた化学実験ショーも3回実施しました。

④ 芸術教科・保健体育の取り組み

美術はエリアコラボレーションと運動する形で、様々な作品に挑戦しました。特に紙粘土を使った作品は生徒それぞれの感性が表現され、武蔵野美術大学教授からも高い評価を得ました。音楽では合唱を中心に行い、11月には老人福祉施設を訪問して合唱を披露するなど交流を行いました。年間4度のスポーツ大会を実施し、保護者との交流も図りました。

⑤ キャリアガイダンス

自分が就きたい職業をテーマとしたキャリア学習レポートを春休みの課題として、その発表会を行いました。また、東芝ラグビー部・富岡主将を招き講演会を行いました。

⑥ I T利用学習

長期休暇を利用し、高校棟コンピュータ教室でコンピュータ活用方法のガイダンスを行いました。

⑦ 論理・表現力の強化

国語科を中心に、各教科レポート提出を重視し、論理的文章の作成、表現力の強化を目指しました。次年度は、2年生で実施する英國研修レポート作成で、その成果を発表でき

る機会を設けたいと思います。

⑧ 体験学習・異文化学習

ホンダ発見体験学習や科学技術館見学などの校外学習を通じて、自然な形で職業意識を高める活動を行いました。2月にはラグビー日本選手権決勝戦を観戦し、日本のトップレベルの戦いを肌で感じる体験をしました。

⑨ セルフ・ラーニング・タイム

放課後、生徒が自主的に残って学習したり、レベルごとの補講を受講したり、学習に対する意識の向上が図れました。

⑩ エリア・コラボレーション

美術、弦楽器共に参加者も多く、活発な活動が見られました。後半はエアロビクスの参加者が減り、発表会の場の設定を検討するなど次年度に課題を残しました。

(2) 生徒指導関連

① スチュードント・ハンドブック

ホームルームでの生徒への伝達事項を削減し、それに伴い、生徒自らが掲示板を見てメモをとるという方法を用い、受身の情報入手から積極的な情報取得を目指しました。また、生活記録表の提出など、担任とのコミュニケーションツールとしても十分な機能を果たしました。

② 保護者連絡システム

保護者や生徒との連絡、新聞を通じた学校からの情報発信と最大限の効果を挙げ、外部広報上も絶大なる威力を發揮しました。

③ 食育指導

大学生協のご協力のもと、年間を通して食育を行うことができました。保健便りと連動して食文化への意識を高めることや食事のマナー指導など副次的な効果もありました。

2. 生徒募集活動

60名定員に対して、74名の入学生を確保でき、開校1年目の活動としては無難に終えることができました。

(1) 保護者説明会

他校とは違う学校説明会のスタイルを貫き、昨年同様大きな反響を呼び、効果的な説明会となりました。説明会を補足する形で開いた個別相談会も盛況で、入学者確保へつながりました。

(2) 学習塾広報

年度前半は塾訪問をしても対応が今ひとつでありましたが、在校生保護者の口コミや出身塾を訪ねた生徒たちの評判の影響で、後半は塾の反応も好対応となりました。塾側からの問い合わせ数も、時間の経過と共に増加していました。

〔VI〕 白梅幼稚園

平成18年度の保育は、3歳児4クラス（67名）4歳児2クラス（62名）5歳児3クラス（87名）総園児数216名で開始しました。

1. 園運営について

（1）保育について

子どもの周辺にみられる遊び空間、遊び仲間、遊び時間の減少という社会的な背景をふまえ、子どもの生活、子どもの遊びのあり方を園全体で検討しあい、保育にあたっていきました。

今年度は、前年より4歳児が1クラス減ることによって、従来のやり方とは異なった活動のすすめ方を工夫し、その結果、クラスを越えた子ども同士の交流、異年齢による遊びの伝承が子どもの遊びにみられるようになりました。

園内研究会では、「一人遊び」と「友達との遊び」の両方の行き来をできない子どもが少子化の中で増加しているという問題に対して、子どものコミュニケーション力を高めていくことをめざしてとりくんでいます。そこで、今年度は、「自分と他者がわかる」「現実と想像をもつ」の要件を含んだ“ごっこ遊び”的実態をとらえて、保育者の働きかけを各年齢毎に深めていけるようにし、とりくみのまとめのテーマにもして、園全体で研究をすすめました。

他園参観をし、園舎建て替えにむかうことも視野にいれながら、教員間で園全体の環境や生活のあり方について話し合いをすすめました。

「わらべうた」「お話と詩（文学）」についての実践研究も積み重ねました。

合同研究会（幼稚園・保育園・大学短大）では、「体と心のつながりを脳をとうして考える」をテーマに年3回行ない、保育園と幼稚園の各々の発育の事例研究をし、保育の仕方を共有しあいました。

（2）チーム保育

保育補助5名の配置により、クラス運営への補助及び園庭の環境を整えて、子どもの遊びの安全面への配慮を行なっていくことができました。

担任と保育補助、あるいは、保育補助間の話し合いをし、全教員で子どもの様子や対応などについて情報交換、意見交換をしあい、対応の方向性や方法を共有していくことに努めました。結果、園全体で多様な子どもの姿への対応をすすめることができ、その子どもたちもとりこんだ子どもたちの育ち合いの姿がみられていました。今年度は、個別に発達に弱さを抱えた子どもが1クラス中に複数在籍するというクラスもあり、個々の要請に応じた受け入れの仕方の検討が年々すすめられています。

活動では、クラス間の交流もあり、クラス単位だけではなく、教員が他のクラスの子どもともかかわりながら保育をすすめました。

（3）関係機関との連携

幼稚園では、入園前からの発達相談にはじまり入園後の様子で個別対応、補助を必要と

する子どもの数がさらに増加しました。同時に家庭の事情で子育ての困難さを抱えている親への対応も求められていました。

他市も含む専門機関（児童相談所、家庭支援センター等）からの連絡や訪問を受け、各々のケースについて話し合い、各々の問題にあわせた対応をしていきました。又、白梅学園大学、短期大学との関わりでは、授業・実習・見学・ゼミ活動への協力に加え、G P（特別支援プログラム）の学生の受け入れ、研究への協力もしました。発達相談等への機会をもち、連携をすすめています。園舎建て替えにむけて、将来構想及び、地域の状況、認定子ども園に関する話し合いを積み重ねていきました。

（4）保護者へのサポート

保護者から幼稚園にもちこまれる相談は、今年度も多岐にわたっていました。子どもの成長に関すること、保護者自身の問題、家庭の問題、家族の問題、梅の実会の運営、保護者同士のつきあい等に加えて、特に、入園前の子どもの発達相談の数も増加しました。発達に弱さを抱えている子どもと保護者へは、園開放の場をつくることをしました。又、今年度も、同じ障害をもつ子どもの親の会を実施しました。親の学習の場、情報交換の場となっています。保護者同士のつながりの中で、互いが安心してすごし、子育てをする親へのサポートを幼稚園が行なっています。

（5）預かり保育

今年度は、障害をもった子どもの受け入れについても、保護者の家庭の事情と子どもの状況とをあわせて、時間や人の配置に配慮しながらすすめています。預けられている子どもも、預けている親にとっては、朝から帰りまでの園生活があることを教員間で理解しあい、どの子どもへも安定した状況をつくるように努めました。家庭の安定の支えとしての役割も大きいといえます。利用頻度はますます増え、様々な事情にできるだけ答える様に努力いたしました。利用者の増加にみあった人員と設備の充実は、ますます望されます。

平成18年度の様子

利用平均	4月	33名	そのうち早朝からの利用者	19名
	5月	35名		20名
	6月	37名		21名
	7月	36名		25名
	8月	25名		19名
	9月	41名		27名
	10月	38名		25名
	11月	41名		26名
	12月	40名		25名
	1月	40名		24名
	2月	44名		24名
	3月	36名		22名

最多 53名（2月22日） 最少 7名（1月4日）

早朝最多 35名（12月21日） 早朝最少 7名（1月4日）

(6) とりくみのまとめ

一年間の実践と園内研究会や地域支援事業等、とりくんだことの記録として、『白梅の保育No.2』にまとめました。白梅幼稚園の保育をさらに発展していくため、教員ひとりひとりが、白梅幼稚園が積み上げてきた白梅の保育の理解と実践の向上に努めました。

(7) 地域とのかかわり

教員が各々の立場を生かしながら、一丸となって白梅の保育を地域に周知する努力をしました。

①親子であそぼう・たねの会

・小平福祉会館 5月20日（土）

市内子育てサークル「きらら」と共催であそびの広場開催

参加者 95組

・白梅幼稚園 9月30日（土）

人形劇場と園庭開放・子育て相談

参加者 45組

②未就園児をもつ親子のためのワークショップ「ひよこの会」・園庭開放

ひよこの会 全16回 園庭・園ホール・池

園庭開放 全16回 園庭

登録者 134名 見学者 57組 各回の参加者平均 46組

ひよこの会は問い合わせが多く、登録者数も例年100名以上越える状況でありこの会をどうして白梅幼稚園に親しみをもつ親も多いので、さらなる工夫をし、魅力のある会にしたいと思っています。

③白梅講座

6月2日（金）～ 6月23日（金）までの毎週金曜日 全4回

内容：白梅幼稚園の保育 ・ケンカをとうして

・一緒にすることは

・ごっこあそび

・園文化（異年齢）

④子どもと親を考える講座

9月8日（金）～10月6日（金）までの毎週金曜日 全5回

内容：子どものこころを探る ・“食べる”ことから

・“つくること”から

・3、4、5歳の心の発達

・友達とは

・子どものタイプいろいろ

⑤地域にむけた保育参観

10月11(火)、12日(水)、13日(木)

⑥おやじの会

幼稚園主催	6月10日(土)、1月27日(土)
おやじの会主催	小平一小と流しそうめん・手作り料理 9月23日(土)
	おやじの春祭り2007 2月3日(土)
	お花見の会 3月24日(土)

小平一小、近隣の幼稚園との交流がみられるなど、地域への広がりがありました。

2. 園児募集

応募者は、3歳児63名、4歳児11名、5歳児2名で、総園児数としては、若干の減少がみられました。

いよいよ小平西地区の就園対象年齢の子どもの減少がはっきりしてきました。幼稚園に対する地域の多様な要求に対して応える努力をするとともに、今やっている保育をさらに充実させることを念頭におきつつ、ひとりひとりの教員が努力した一年でした。さらに、幼稚園の魅力を多くの方に知ってもらうために、今後は、広報活動にも力をいれていきたいと思います。